

神拝のしおり

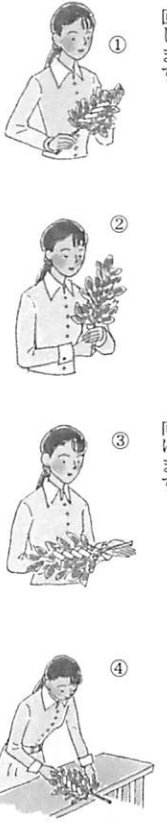
参拝

○ 手水の作法
 神社にお参りするときは、まず、手水舎で右手でひしゃくを取り、左手を流し、次にひしゃくを持ちかえて右手を流します。次にひしゃくで左手に水をためて口をすすぎます。これは、身や心を清めてから神さまにお祈りするためです。



○ 玉串奉奠の作法

玉串とは、榊などの常緑樹の小枝に紙垂を付けたものです。神さまに拝礼するさい、玉串に真心を込めて捧げます。



○ 参拝の作法

二拝二拍手一拝（二礼二拍手一礼）
 神様の前へ進み、真心込めて二回ゆつくりと拝（九〇度位の深い礼）をします。次に二回拍手（力強く）をして心の中でお祈りをします。次に一回拝（九〇度位の深い礼）をします。

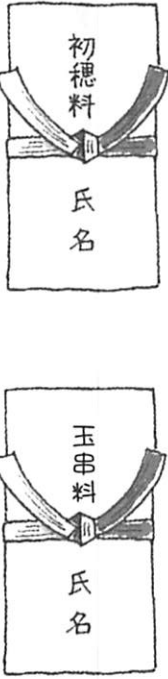
※お参りするときは、背筋をのびし、気持ちをはらぎ、素直な気持ちでお参りします。玉串を使った拝礼もあります。家の神だにも同じ作法でお参りします。

また、神社の前を通るときは、軽く頭を下げましょう。
 ※家の神だには朝夕欠かさずお参りし、一日の安全と感謝を祈りましょう。



○ 祈願料の熨斗袋の表書

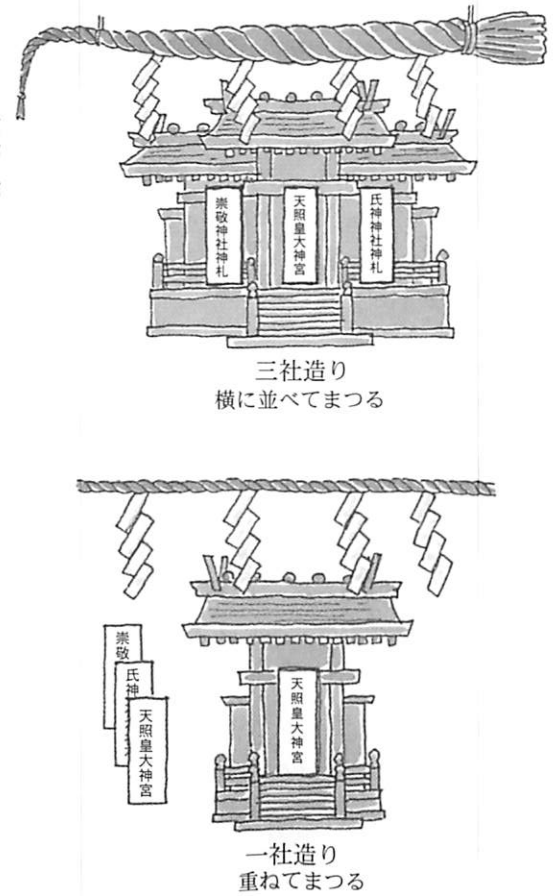
家内安全など神社で祈願を受ける際、お供えする熨斗袋の表書きは「初穂料」あるいは「玉串料」と書きます。



神棚

○ 神札のまつり方

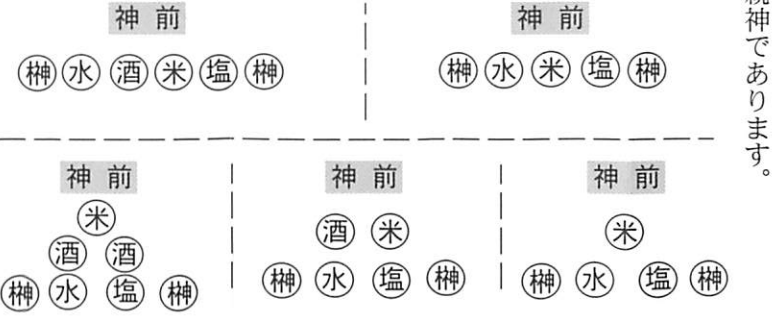
※祈願料は、祈願の前にお供えしましょう。



○ 神饌（お供え物）と榊

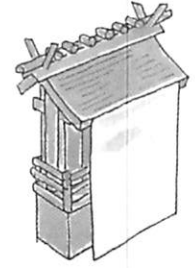
神饌（神さまへのお供え物）を供えるときには、順番があります。例えば、お米・お塩・お水の場合には、①お米または御飯（中央）、②お塩（向かって右）、③お水（向かって左）の順です。お酒もお供えする場合は、①お米（向かって右）、②お酒（向かって左）、③お塩（お米の右④お水（お酒の左）の順です。横一列に並べるのが基本とされていますが、場所がとれない場合は二列でも結構です。その場合、図のような並べ方をします。

その他、初物や季節の食べ物、いただき物などは、私たちがいただく前に、まず神さまにお供えしましょう。



○ 忌中の神棚

家族の葬式の時
 神棚……亡くなってから五十日まで正面に白い紙をはり、おまいりやお供えは遠慮しましょう。



神札……お正月の神札はいつもどおり受けましょう。五十日すぎたらおまつりしましょう。

親戚の葬式の時
 神棚……いつもどおりおまいりしましょう。神札……いつもどおりおまつりしましょう。

神拝詞

被詞

掛けまくも畏き 伊邪那岐大神 筑紫の日向の橘
小戸の阿波岐原に 御禊被へ給ひし時に生り坐せる
祓戸の大神等 諸諸の禍事 罪穢有らむをば 祓へ給
ひ清め給へと白す事を 聞こし食せと 恐み恐みも白す

(「神棚拜詞」「神社拜詞」に先だつて唱える)

大被詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以
ちて 八百萬神等を神集へに集へ賜ひ 神議りに議り
賜ひて 我が皇御孫命は 豊葦原水穗國を 安國と平
けく知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依さし奉り
し國中に 荒振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ
神掃ひに掃ひ賜ひて 語問ひし磐根 樹根立 草の片
葉をも語止めて 天の磐座放ち 天の八重雲を伊頭の
千別きに千別きて 天降し依さし奉りき 此く依さし
奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め奉
りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に千木高知
りて 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて 天の御蔭 日
の御蔭と隠り坐して 安國と平けく知ろし食さむ
國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ種種
の罪事は 天つ罪國つ罪 許許太久の罪出でむ 此く
出でば 天つ宮事以ちて 天つ金木を本打ち切り 末
打ち断ちて 千座の置座に置き足らはして 天つ菅麻
を本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取り辟きて 天つ
祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の
八重雲を伊頭の千別きに千別きて 聞こし食さむ 國
つ神は高山の末 短山の末に上り坐して 高山の伊褒
理 短山の伊褒理を搔き別けて 聞こし食さむ 此く聞
こし食してば 罪と云ふ罪は在らじと 科戸の風の天
の八重雲を吹き放つ事の如く 朝の御霧 夕の御霧を
朝風 夕風の吹き拂ふ事の如く 大津邊に居る大船を
舳解き放ち 艦解き放ちて 大海原に押し放つ事の如
く 彼方の繁木が本を 焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃ふ
事の如く 遺る罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を
高山の末 短山の末より 佐久那太理に落ち多岐つ
速川の瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神 大海原に持ち
出でなむ 此く持ち出で往なば 荒潮の潮の八百道の
八潮道の潮の八百會に坐す速開津比賣と云ふ神 持
ち加加呑みてむ 此く加加呑みてば 氣吹戸に坐す
氣吹戸主と云ふ神 根國底國に氣吹き放ちてむ 此
く氣吹き放ちてば 根國底國に坐す速須良比賣と
云ふ神 持ち佐須良比賣ひ失ひてむ 此く佐須良比賣ひ
て 罪と云ふ罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を
天つ神國つ神 八百萬神等共に 聞こし食せと白す

(神社や神棚に参拜する際に唱える詞。大祓式で唱える詞)

神社拜詞

掛けまくも畏き 「神社の大前を拜み 奉りて
恐み恐みも白さく 大神等の広き厚き御恵を 辱み
奉り 高き尊き神教のまにまに 天皇を仰ぎ奉り 直
き正しき真心もちて 誠の道に違ふことなく 負ひ持
つ 業に励ましめ給ひ 家門高く 身健に 世のため
人のために 尽さしめ給へと 恐み恐みも白す

(神社に参拜した際に、各個人で奏上する詞)

略拜詞

祓へ給へ 清め給へ 守り給へ 幸へ給へ

神棚拜詞

此の神床に坐す 掛けまくも畏き 天照大御神
座土大神等の大前を拜み奉りて 恐み恐みも白さく
大神等の広き厚き御恵を辱み奉り 高き 尊き神教
のまにまに 直き正しき真心もちて 誠の道に違ふこと
なく 負ひ持つ業に励ましめ給ひ 家門高く 身健に 世
のため人のために 尽さしめ給へと 恐み恐みも白す

(家や職場の神棚で唱える詞)

祖霊拜詞

代代の先祖等(何某の御霊)の御前を拜み奉りて 慎
み敬ひも白さく 広き厚き御恵を辱み奉り 高き
尊き家訓のまにまに 身を慎み業に励み親族家族
諸諸心を合せ 睦び和みて 敬ひ仕へ奉る状を 愛ぐ
しと見そなはしまして 子孫の八十統に至るまで
家門高く 立ち栄えしめ給へと 慎み敬ひも白す

(家の祖霊舎へ祖先に感謝し唱える詞)

食前感謝詞

「たなつもの百の木草も天照す
日の大神の恵みえてこそ」
頂きます

食後感謝詞

「朝宵に物くふごとくに豊受の
神の恵みを思へ世の人」
ご馳走さま